

## 序にかえて

郷土を愛しその繁栄をこいねごう者は郷土の歩んできた姿を知りたいと思うことでしよう。

日高にはまだその歴史をまとめたものがなく何とかして正しい日高のうつりかわりを解明した冊子を公にしたいものと考えていたところですが、このたび日高支庁開庁八十周年を迎えその記念行事の一つとして「日高開発史」が出来上り、宿望をかなえることができたことは、この上もない喜びです。

日高の黎明は遠く寛政年間に明け初めたといわれ、幾多のぎせい者を出して成つたでありましょう黄金道路の開さくや、沢に群をなす野馬を集めて遂にはわが国に冠たる馬産王国を実現したこと、それからまた豊稷の田畑が奥地へとひろがり、漁船の群は沿海に或は北洋に進出する日高今日の盛況を思いますとき、先人古老の血のにじむ苦闘に対し感謝敬けんの情に襟を正さざるを得ません。そうして日高山脈には今なお金、銀、銅、コバルト、鉄、石油、クロム、ニッケル、石綿、石炭、黒鉛、アンチモニーなど幾多無尽蔵の地下資源が未開発のまま埋蔵され、凡そ一億五千万石の森林はうつ蒼と茂っています。

また日高山脈の高峰峻嶺より発する多くの河川は水力発電に適しており、電源を開発することによつて各種資源の工業化が約束されているのでありまして、これらの資源を開発することは偏に私ども日高住民の双肩にかゝつているといわなければなりません。

この書は明日の日高の栄ある建設のため、郷土を愛する日高の住民諸君に贈るとともに、他山の石として序にかえて

序にかえて

大方の参考に供したいとこの様に念じて世におくる次第です。

この書を編集するにあたり、終始猷身的努力を惜しまれなかつた北海道史料編集長橋文七氏をはじめ資料の蒐集に御協力を戴いた界頼吉氏、小関一雄氏、柳沼高杉氏に対して深く感謝の意を表します。

昭和二十九年二月十五日

日高支庁長 長澤豊太郎

# 日高開發史目次

題 字 北海道知事 田中 敏文

序にかえて 日高支庁長 長澤 豊太郎

写真・図面

## 第一編 開發前史

一 概 説	一
二 遺物と口碑	一
1 沙流川下流の遺跡	四
2 三石の遺跡	四
3 襟裳岬地方の遺跡	五
4 津浪の口碑	六
5 掠奪戦(トバトミ)の口碑	七
6 民族移動の口碑	八
目 次	三

## 目 次

三 アイヌの自然と生活 一〇

1 動植物の利用 一〇

2 地理的知識 一一

四 和人の来住 一五

1 封建性の確立 一五

2 蝦夷の黄金 一六

3 寛文事変 一六

4 日高七領 一九

五 場所の発達 二〇

1 場所の変遷 二〇

2 交通の整備 二九

3 産業の進歩 三三

4 調査探検 三七

5 宗教工作 三九

## 第二編 開拓創業

一 概 説	四七
二 先駆移民の開村	五一

1	新政の動き	五一
2	仙台藩民富川に入る	五二
3	彦根藩の計画	五八
4	稲田氏主従の移住	六一
5	九州からの移民	六六
6	赤心社の開拓	六八
7	ルベンベ(豊畑)の団体移住	七二
8	東北漁民の着業	七三
三 産業その緒に就く		
1	漁場改革	七六
2	初期の農業	七八
3	日高の牧場	八一
4	アイヌの授産	八五
5	自然の災害	八八
四 文化の漸進		
1	行政の整備	九一
2	交通の改善	九五
3	学校の創設	九八
目次		
		五

### 第三編 拓殖進展

目次

六

——明治十九年より四十五年に至る北海道庁前期——

一 概説		
二 行政の展望		
1	支庁及び各村の整備	一〇四
2	住民の政治活動	一〇四
3	西支庁長	一〇五
三 開拓地の拡大		
1	開拓線の前進	一〇六
2	沙流川沿岸の開発	一〇九
3	人口の増加	一一〇
4	耕地の拡大	一一四
四 産業の発達		
1	畑作の盛期	一一〇
2	伐採と造林	一一〇
3	良馬の生産	一一三
4	漁法の改良	一一七
		一一三

5 自然の災害	一三五
五 交通と文化	一三七
1 陸の交通	一三七
2 沙流川沿岸の交通	一三八
3 海の交通	一四一
4 学校の増設	一四三
5 アイヌの保護と教育	一四九
6 足跡を印した人々	一五一
7 表彰に輝く人々	一五二

## 第四編 新時代への歩み

——大正元年より昭和二十八年北海道庁後期及び北海道時代——

一 概 説	一五五
二 行政上の諸問題	一五八
1 歴代の支庁長	一五八
2 町村行政	一五九
3 拓殖計画と日高	一六〇
4 御料地の解放運動	一六二

## 目 次

5 門別演習地の問題	一六四
6 道議会及び国會議員の選挙	一六五
7 戦時下の日高	一七〇
三 人口の増加	一七二
1 総人口増加のあと	一七四
2 人口分布の変化	一七六
3 職業別人口構成	一七六
4 集落の発生	一七七
5 アイヌの人口と集落	一七八
四 新しい農業	一七八
1 開拓地域の拡大	一八一
2 稲作の勃興	一八三
3 各作物の消長	一八五
4 農業団体の概要	一八七
5 農地解放のあと	一八七
五 森林資源の開発	一八七
1 森林王国日高	一八八
2 森林の伐採	一八八

3	林産物	一八九
4	林業と地方開発及び住民生活との関係	一九〇
5	沙流川の流送	一九一
6	森林の保全	一九二
六 畜産業の変遷		
1	馬産の推移	一九四
2	牛の増加	一九九
3	緬羊の重要性	二〇四
七 漁業の発展		
1	生産高	二〇六
2	漁獲物	二〇六
3	漁船と漁港	二〇七
4	漁法	二〇八
5	資源の保護	二〇九
6	漁村の生活	二〇九
八 シローム鮎業の躍進		
1	鮎物資源の開発	二一一
2	シローム鮎業の発展	二二二

目次

目次		
九 工業の漸進		
1	木材工業	二二四
2	醸造業	二二四
3	東邦電化株式会社	二二五
一〇 自然の災害		
1	冷害凶作	二二七
2	三陸の津浪と十勝沖地震	二二四
3	千珠丸の油害事件	二二九
一一 交通の整備		
1	日勝道路と右岸道路の開通	二三〇
2	日高線の全通	二三三
3	自動車交通の発達	三三七
4	海運中心の時代去る	三三八
一二 進む文化の波		
1	教育の移りかわり	二四一
2	生活文化	二五七
3	日高路の観光	二六一
4	学術研究	二六三

5	出版と記念事業	二六四
6	アイヌの保導	二六七
一三	総合開発への希望	二六九
1	第二期拓殖計画における問題点	二六九
2	日高総合開発の基本構想	二七〇
3	日高奥地林の開発	二七二
4	総合開発計画の現状調査	二七二
	表	二七五
	あ	二八六
	と	
	が	
	き	

目次

地人

和豐

文